

チャドルの内側にある自由

イメージと乖離するイランの日常と市民の思い

米国ブッシュ大統領から「テロ支援国家、悪の枢軸」と名指しされるイラン。一九七九年のイラン・イスラム革命以降、欧米との対立姿勢を鮮明にする。イスラム教シーア派の主導するこの国の民衆の意外な素顔をレポートする。

近藤雄生

トルクメニスタンから雪山の国境を越えてイランに入ると、漆黒の布に全身を包んだ女性たちが青空の下にいくつもの黒い影を作っていた。チャドルと呼ばれるその布の黒色がイランという国を強く印象付けた。

イラン北東部の聖地マシユハドで、一緒に旅を続けている妻が、神聖なエマーム・レザー廟に入るためにチャドルを買いに行く、布屋の中で私たちの姿を興味深く眺めていた数人のチャドル姿の女性たちが妻に着手を手ほどきしてくれた。そのうちの一人が「ほら、こうやって着るのよ」と、笑顔で自らのチャドルをさつと開いてみせてくれたことに驚いた。決してその中など見ることはできないと思っていたチャドルの内側は「普通の洋服だった」。

妻が彼女たちに手伝ってもらいながら、袖のある「アラブ」式チャドルを着ると、一分とかからないうちに、妻も、彼女たちと同様の姿となる。私たちと彼女たちイラン人の距離は、考えているほど遠くないのか

もしれない、と思った。

作られたイメージ

イランと聞いて私たちが思い浮かべることは、誰でも大きな違いはないように思う。核開発問題とそれに付随する米国との緊迫した関係や、解決まで長期にわたった日本人誘拐事件など、不穏なニュースばかりが頭をよぎる。横暴な米国に対してイラン人はみな頭にきいているはずだ。イラン・イスラム革命を経た厳格なイスラム教国で異教徒にとっては入りづらい世界なのではないか。私も、そんなことを思いながらこの国に入国した。

しかし実際に訪れてみると、この国があまりにもメデアから得たイメージと違っていたことに驚かされた。そして、市井の人々と話すうちに、メデアでは生身のイラン人についてはほとんど何も語られていないことに気づかされた。

「ほくら若い世代は、ほとんど誰もイスラム教なんて気にしてないです

よ。酒だって飲むし、パーティだってやる。イランは街なかこそそういうものがないだけで、家の中にはなんでもあります。日本やアメリカと同じなんです。礼拝なんて、九〇%の人はやらないんじゃないかな」

テヘランのメガネ店の二十七歳の男性が当たり前のようにならう話した。イラン人は誰もが日の出前からアッラーの神に礼拝しているのだからと考えていた自分にとって、それはショックな言葉でもあった。ただその一方で、そう聞いてやっとならう「女性性は髪を隠さなくてはならない」という法律をほとんど気にしないかのように、スカーフを大きく後ろにずらし髪を露にして颯爽と歩くテヘランの若い女性たちの姿に納得がいった。イランが採用するイスラム法の下では女性が外では着られるはずもないノースリーブのドレスが街で売られていることも頷けた。

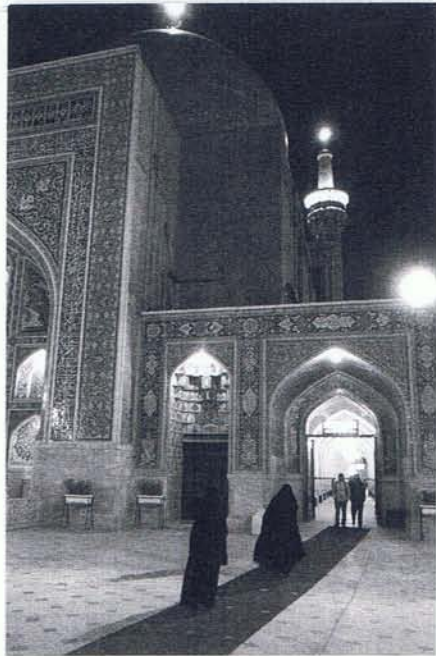
その後、テヘランから、アルメニアとの国境近くに至るまで、会う人会う人に、酒は飲むのか、礼拝はす



小さな町のマーケットで。黒いチャドルに身を包んだ女性の姿が、常にイランを印象付ける。



テヘランで。先遣国の都市と変わらない風景がどこにでもあるが、町の至るところにホメイニ師やハメネイ師（現イランの最高指導者）の肖像が飾られている。



イラン北東部マシュハドのエマーム・レザー廟。イランで最も重要な聖地の一つで年間1200万人以上の人々が巡礼に訪れるという。



エマーム・レザー廟の大きな講堂で礼拝する人々。広大な敷地のいたるところでこのように礼拝が行なわれ、中心に位置するエマーム・レザーの墓のある部屋は、常に驚くべき熱気に満ちている。

るのか、という質問を投げかけてみたが、「礼拝はたまにする、でも酒は飲むよ」というあたりが平均的な答えのようであり、メガネ店店員の言葉が決して極端な意見ではないことが感じられた。

政府のやり方にうんざり

BBCの報道では、国際的な英語検定試験IELTSの受験者数から判断して、イランから抜け出したと考えている教育のある若者の数は、アハマディネジャド政権が始まった○五年から、一年あまりの間に二・五倍にもなったとしている。イスラムの規範に厳格なアハマディネジャド政権の強硬なやり方にうんざりしている国民は多く、イラン人たちにとっての問題は、米国などよりも、自分たちの政府の方にあるようだった。メガネ店の男性が続ける。「反米デモの映像ばかりがテレビで流れるけど、あんなのは嘘っぱちで

強制に対する反発

彼らのそんな言葉を聞くたびに、イランの風景は少しずつ違って見えるようになってくる。厳格なイスラム法により統治されたこの国の人々も、必ずしもイスラム中心に生きていくわけではなく、自分たちとそう違わないと感じるようになってきた。その思いはさらに、イラン人の私たち

すよ。政府は都合のいいニュースばかりを流している。アメリカ政府のことはみなよくは思っていないけど、アメリカ人は好きだし、アメリカ的な生活をほくらは求めているんです」

日本で働いていたことがあるという大工の男は、「アメリカが好きってわけではないけれど、いまのイラン政府を倒してくれるのなら、うれし いね」と話し、設計士の若い男は、とにかくアメリカが好きだと言った。イラン政府について肯定的に語る人にはほとんど出会わなかった。

外国人への厚いもてなしを知ることにつけても強まっていた。イラン人には、家に招かれ、泊めてもらうこともしばしばあり、そのホスピタリティ(歓待)は驚くほどのものだった。食事から交通費まですべてお世話になり、恐縮してしまいうことも。私たちはアジアからヨーロッパにかけて数年にわたって旅をし生活をしてきたが、自分たちの経験からいえば、イラン人のホスピタリティに及ぶ国はそう多くはない。

そのホスピタリティをイスラム教の寛容さということと結び付けられるのかどうかは分からないが、イラン北西部の都市タブリーズで出会った、敬虔なイスラム教徒らしい大学生の以下の言葉を聞いたとき、彼らが、イラン政府の非寛容さにこそ不満を抱いているのだらうということ

が分かったような気がした。「いまのイランにあるのはもはやイスラム教ではありません。イスラム教は自分がよく生きるためのもの。コーランに『酒は体に良くない』と書いてあるけど、飲むか飲まないかを決めるのは個人の自由で、誰かに強制されるものではないのです。酒を飲んだら警察に捕まるといいうイランは、もはやイスラム教とは違う世界になってしまっています」

あくまでも自分の意見だが、と付け加えた上でそう話し、その後、カナダへの移民の方法を真剣に考えていることを話してくれた。モスクの中はもちろん、安宿の廊下などでも、小さな絨毯じゅうたんを敷いてひとり静かに礼拝する人々を見かけることは多々あった。冒頭に記した聖地マシュハドの核となるエマーム・レザー廟の中では、遠い昔の指導者へ祈りを捧げるイスラム教徒たちの驚くべき熱気に圧倒された。伝統的なイスラム世界はいまも確かにイランにある。イラン人の多くはおそらく、イスラム教自体に違和感を覚えているのではなく、イスラム教を必要以上に強制される現在の体制に反発しているのだらう。

真つ黒のチャドルが厳格なイランのイメージを作り上げる。しかし、そのチャドルの内側に、きつと誰もがそれぞれの自由な人生観を握り締めている。

写真撮影／筆者

こんどう ゆうき・ルポライター。